

ホルヴァートの『フィガロの離婚』 転換期の芸術

島 谷 謙

< - > 作家と作品

エデン・フォン・ホルヴァート

亡命作家達は時代の閉塞感を打ち破るため、歴史に関心を寄せ、相次いで歴史劇を執筆した。ホルヴァートとフリードリヒ・ヴォルフの二人の劇作家は、フランス革命前夜に活躍した劇作家ボーマルシェとその代表作『フィガロの結婚』に相次いでインスピレーションを得て劇作品を書いた。本考ではホルヴァートの作品を考察する。

オーストリア出身のエデン・フォン・ホルヴァート(一九〇一～一九三八)に関しては一九六〇年代中葉にドイツでホルヴァート・ルネッサンスが起きて盛んに上演され、日本でも戯曲と小説に分けて二冊の著作集が刊行され、その生涯に関しては比較的良く知られている。オーストリア・ハンガリー帝国の外交官の子として生まれ、父親の赴任地を転々とし、一九一九年にミュンヘン大学に入学。一九二四年以降、作品を発表し、執筆活動を展開。一九三三年にミュンヘン近郊の実家がナチスの搜索を受け、ホルヴァートはオーストリアへ亡命した。一九三八年にオーストリアを離れ、ハンガリー、ユーゴを経て三月にパリへ向かう。同年六月、シャンゼリゼの並木道で突然の落雷で倒れた木の枝が直撃し、三十七歳の若さで即死した。

作品

本稿では彼のオーストリア亡命時代に『戦場から帰ったドン・ファン』と同時期に書かれた劇『フィガロの離婚』(一九三六、未邦訳)を取り上げる。

この作品はボーマルシェがフランス革命前に書き、モーツァルトのオペラ化によって広く知られる『フィガロの結婚』(一七七八)の世界を引き継ぎながら、革命直後に時期をずらし、その後のありうべき展開を描き出したものである。主人公のフィガロや主人のアルマヴィーヴァ伯爵達が革命を逃れて隣国に亡命するという設定となり、ボーマルシェの作品とは異なる状況下に置かれた主人公達の行動や心境の推移が興味深く描かれる。

作品は三幕、十三場面からなる。時代は『フィガロの結婚』初演の五年後に起きたフランス革命勃発直後。

第一幕。深夜、国境地帯の森。

アルマヴィーヴァ伯爵夫妻と従僕フィガロ、その妻スザンヌが革命を逃れて国境地帯の森をさ迷う。遠くで銃声が聞こえる。四人は月明かりだけをたよりに国境を超え、体中傷だらけ。森の中に家の光が見えてくる。そこは隣国の国境監視所。四人は監視兵に捕まる。伯爵は元外交官と名乗る。夫人は過労で倒れる。フィガロは孤児に生まれて苦労した生い立ちを語り、祖国に留まるか主人と逃げるか考えた末に逃走を選んだと言う。伯爵夫人は注射で意識を回復したものの、追跡される不安が鎮まらない。スザンヌも革命を嫌っている。

数日後、隣国の首都にある宝石店。伯爵が訪れ、かつて新婚旅行で訪ねたと懐かしげに語る。伯爵は店主に宝石を売ろうとするが安く買い叩かれる。伯爵が助けを求めた隣国の次官補の手紙には、フランスとの外交に支障を招くため力添えできない旨が記されている。伯爵は憤慨し、不正な取引を暴露すると息巻く。

三カ月後、アルプスを望む二千メートル級の山岳保養所。クリスマス前日。体力を回復した伯爵夫人はスケートに出かけ、伯爵はカジノで遊ぶ。フィガロはスザンヌに、宝石を売った金では復活祭までしか生活できない、クリスマスには帰国できると言う伯爵の見通しの甘さを指摘する。フィガロは自立する必要があると述べ、売りに出た理髪店を買って、元の理髪師になることを提案する。彼は独立しない限り子供も持てないと説得する。伯爵は

フィガロの願いをあっさり認める。

第二幕。亡命から九ヶ月経った九月末。

隣国の村グロースハダースドルフ。フィガロは理髪店を買い取り、理髪師となる。店は客の評判もよく順調である。得意客の娘が祭りの主役を務めるから来るよう誘われるが、スザンヌは気分がすぐれないと断る。

客が帰った後、フィガロは顧客をつなぎとめるため祭りに行くよう妻を促す。スザンヌは村の生活に不満を覚え、フィガロが仕事のことばかり考え、子供を持つとしないことに強く反発する。

伯爵夫妻が滞在する町の住い。伯爵達は既に二週間分の家賃を滞納し、夫人は督促に脅える。スザンヌから届いた手紙にはフィガロへの不満が記され、伯爵達の許へ戻りたいと書かれている。伯爵は自分の回想記を新聞が掲載しないことに憤慨する。夫人は夫に気分を変えるため喫茶店に行くよう促し、自分は倹約して食事を取らない。

再びグロースハダースドルフ。理髪店ではスザンヌが営林署副官の髭を剃っている。髭剃りが終わると、副官はいきなり彼女にキスし、今度は外で会おうと言って出て行く。産婆が現れ、出産が相次ぎ大忙しだと言うと、スザンヌは夫が自分を構ってくれないと嘆く。産婆は懐妊したと騙すことで本当に懐妊することもあると入れ智恵する。産婆から妻が懐妊したようだと言われたフィガロはうろたえる。スザンヌは夫の反応をなじる。フィガロは今の時代には子供を持つことはできないと述べる。スザンヌは反発して、フィガロの子供などもう欲しくないと言う。

大晦日、村のホテルの宴会場。隣室に一人座っているスザンヌの所へ副官が現れ、二人が密会しているという噂が立っていることを気にする。スザンヌは噂など気にもとめず、夫と別れると言う。副官は驚いて、自分との関係を表沙汰にして離婚の手段にするつもりかと怒る。投げやりな様子の彼女に対し、副官は火遊びのつもりが自分の体面まで失いかねないことに慌てて、立ち去る。入れ替わりに現れたフィガロに向かって彼女は、懐妊しようとして夫を欺いたことを告白する。

店の得意客達が来たため、二人はその場を取り繕って離れる。客達はスザンヌと副官の噂話をし、良家の男をスザンヌが誘惑した、他所者^{よそ}を入れるべきではないと話す。話を聞いたフィガロは驚いて、妻が客達に侮辱されたたと抗議する。客達は他所者は何も要求する資格がない、村で仕事ができるだけでも喜ぶべきであると反発する。客達が立ち去り、産婆はフィガロに村人達のことを気にかけて、妻を大切にせよと忠告する。副官が来て既婚者には手を出さないと言う。年明けの鐘の音が響き、フィガロは妻に謝るが、彼女は謝らない。

第三幕。

半年後。国際亡命者救援委員会事務局で事務局長ドクトル女史が党派、階級、宗教を超えた支援を呼びかける声明文を口述筆記させている。伯爵とスザンヌが面会に訪れる。スザンヌは夫と別れたことを話し、伯爵の元小姓シェリュバンの店で働くため労働許可証を申請する。彼女はフィガロが離婚後、店を畳んで村を去ったと話す。伯爵は不動産売買等の代理業を行い、知らずに詐欺行為に加担した件で相談する。事務局長は出頭するよう促す。

同じ日、革命が起きた国の伯爵の元城館。城館は今では孤児院となっている。玄関で元伯爵お抱えの庭師アントニオと娘婿の元馬丁で城館の管理者となったペドリロが口論している。義父アントニオは革命前の時代を良き時代と回顧し、娘婿ペドリロは伯爵が無数の犯罪を犯したと批判する。そこへフィガロが姿を現す。ペドリロはフィガロを亡命したやくざ者と非難する。フィガロは妻についていったにすぎず、彼女とは別れ、故郷に戻って来たたと述べる。ペドリロがフィガロを逮捕しようとする、フィガロは自分が城館の管理者になった書類を見せる。フィガロは孤児達に新しい主人として挨拶する。ペドリロ夫妻は反発するが、どうにもならない。

さらに一年後。隣国で元小姓シェリュバンが経営する喫茶店。彼はウェイトレスとなったスザンヌが客に愛想良く振舞うよう指示する。彼は彼女を雇ったことで恩を着せ、彼女への恋心を歌に託して求愛する。彼女は再婚する意思がないと答える。警部が現れ、スザンヌの労働許可証の期限が切れた

と伝える。そこへ法の裁きを受けて服役していた伯爵が一年振りに釈放されて店を訪れる。警部は延長許可願いを申請するよう言い残して立ち去る。スザンナは伯爵にフィガロから帰国を求める手紙が来たことを告げる。

国境地帯の森。深夜、スザンヌと伯爵が国境を越えて帰国しようとする。既に夫人を病で失った老齢の伯爵は疲れ果て、彼女からはぐれて監視兵に捕まる。

伯爵の元城館。フィガロが心待ちにするスザンヌの返事は一向に届かない。フィガロは伯爵が逮捕されたことを知ると身柄の引受人となることを申し出る。そこへ突然スザンヌが姿を現す。フィガロは驚きながらなぜ返事を出さなかったのか尋ねる。彼女は返事を読み上げる口調で、フィガロは離婚の責任があると謝罪しているが、あなたは最悪の人で私はあなたを恨んでいると述べてから、いきなり相手に抱き付く。彼も彼女を抱きしめて二人は長いキスを交わす。その時伯爵が現れ、自分が釈放されたことを感謝する。伯爵はフィガロによって再び元の居室に住むことが許される。伯爵が「革命は終わったのか」と問いかけると、フィガロは「革命は今ようやく勝利した」と答える。(幕)

<二> 作品世界

『フィガロの結婚』

『フィガロの結婚』では従僕フィガロが伯爵アルマヴィーヴァの策略から侍女スザンナを守り、結婚へこぎつける。この作品は第三身分である民衆の貴族に対する反抗心を謳いあげ、フランス革命を精神的に醸成した作品であり、モーツァルトの傑作オペラ(一七八六)によって世界的に知られる。ポーマルシェがこの作品の後に書いた『罪ある母』(一七九一)では、フィガロは伯爵に忠誠を誓い、伯爵一家の乗っ取りを図った秘書と闘い、秘書を追放する。ここではフィガロの闘いは旧体制に向けられずに、貴族の延命に向けられていることもあり、メロドラマ的で革命の時代に訴える力は持たず、文学的評価も低い。

ホルヴァートの『フィガロの離婚』は貴族への反抗という点で『フィガロの結婚』を引き継ぎながら、『罪ある母』に示された主人である伯爵を救うというフィガロ像が加わっている。フィガロとスザンヌ、伯爵夫妻だけでなく、小姓シェリュバンや庭師アントニオなどもボーマルシェの作品で出てくる人物である。

伯爵とフィガロ

この作品はフィガロとスザンヌが伯爵達と共に革命を逃れて亡命し、定住を試みて挫折し、離婚を経て帰国し、夫婦が和解に至る物語である。フィガロとスザンヌの亡命体験およびフィガロ夫婦の離婚とその復縁という二つのテーマが重なり交錯している。まず伯爵をめぐる状況を見ておく。伯爵が革命によって身の危険を覚え、隣国へ逃れたことは歴史の成行きである。

伯爵は「国王が処刑され、貴族は追放、財産没収、教会破壊、特権廃止、浮浪者も平等」(S.14)という事態に憤慨する。彼は革命を予期しなかったばかりか、二カ月もすれば革命が終息すると考え、見通しの甘さを示す。彼は革命は「野蛮な本能の反抗である」と考え、「国民特に農民の健全な感覚で反乱が失敗する」と予想する。それまで一度も国民、農民の生活苦など考えたこともない者には、彼らこそが反抗の担い手であるとは想像もできない。また親しくしていた隣国の政治家が無条件に助けてくれると思込む点にも、政治的感覚の欠如が見られる。

伯爵は「生まれながら贅沢する権利がある」(S.30)と思込み、亡命先でも高級ホテルに泊まりカジノで遊んで、有り金を使い果たしてしまう。市民的な年金生活をするぐらいなら死んだ方がまだと考える。貴族としての自尊心だけは強く、亡命を強いられながらもなお、他者から批判がましい真実など聞かされたくない、「自分に無条件に同調して欺いてくれる方が良い」というお人好しである。

伯爵は亡命中に金銭的に行き詰まり、慣れない商取引を行い、結果的に詐欺事件に関わり、一年間刑務所に入る。妻も病死し、出獄後、万策尽きて逮

捕を覚悟で帰国する。彼には異国での死か帰国後の処刑という道しか残されていなかったといえよう。しかしフィガロに暖かく迎えられたことで悲劇は辛うじて回避される。ではフィガロと伯爵との関係はどう推移したであろうか。

革命直後、伯爵は自分が何も犯罪を犯していないのに祖国を逃れなければならないことに憤慨する。一方、フィガロは相手が高貴な生まれというだけで犯罪だと冷ややかに対応する。国王の処刑、貴族の追放、特権廃止に憤る伯爵に対して、フィガロは「人々の反抗は致し方ない」、「(革命の)勃発を予言していた。」と言う。彼は「従僕存在は主人の気紛れに依存する」(S.23)ことを自覚していた。それゆえ忠誠心から一緒に亡命した訳ではない。

孤児として生まれ育ったフィガロは出自により人間を差別する封建社会の理不尽さを人一倍感じながら生きてきた。貴族の横暴や独善を批判し彼らの無能さを嘲笑してきた。しかし革命の混乱の中で、生活の基盤を持たない従僕ゆえ自立するメドが立たない。とりあえず落魄した主人について行く他に生きる術が見出せなかった。

亡命後、彼は「一つの世界が崩壊した」と語り、伯爵達に関わることは「仮死状態の人に話しかけ、瀕死の人の前で人生を擁護するために道化役を演じ、嘘をつく」(S.34)ことと感じた。それゆえフィガロは「伯爵夫妻にとって国境を越えずに人々に殴り殺されていた方が良かったのかもしれない」、「伯爵夫妻はもはや生きていない(も同然)」(S.35)とさえ言い切る。ここに革命によって全ての特権を奪われ無用者となった貴族に対する平民の冷徹な認識が示されている。

フィガロとスザンヌ

異国にあってフィガロは伯爵から離れて自立し、「自分自らの主人となる」(S.36)ことを目指す。彼が暇乞いを申し出た時、伯爵はフィガロの「消極的抵抗を以前から感じていた」と語る。フィガロは「すべては積極的自己保

存の衝動」(S.39)であると応える。彼は孤児として「幾度も飢えた」体験があり、主人の庇護を離れて、独立した市民となることを恐れない。ここに主人の下僕としての呪縛を断ち切り、失敗の危険を背負いながらも市民として自立しようとする近代人の姿が示されている。

一市民となったものの、フィガロにとって自立への道程は厳しかった。彼は自分の店を構えて後もお子供を持つことが決心できない。ここで妻ズナンとの関係がクローズアップされる。作品の主軸をなすフィガロとズナンとの関係を見ておきたい。

ボーマルシェの『フィガロの結婚』において侍女ズナンは伯爵に弄ばれる目に遭いかけた。伯爵夫人の一計により伯爵の目論みをかわし、フィガロとの結婚にこぎつけた。このように貴族の横暴の犠牲になりかけた過去を持つ。しかし自分を助けてくれた伯爵夫人とは強い信頼関係にあった。それゆえ世間知らずで老いた伯爵夫妻を見捨てるに忍びなかった。

ホルヴァートの『フィガロの離婚』においてフィガロは祖国に留まることもできたが、ズナンの意思に従って伯爵と共に亡命した。彼女は彼が亡命したことを後悔し、暗に彼女を非難していると考え。彼女は伯爵宛ての手紙の中で、フィガロは店のことしか考えず、彼女を疎かにしていると記す。彼女はフィガロに対して、彼がかつては真実のために闘ったのに今では俗物になったと非難する。フィガロも妻としての役割を果たしていないと反発する。亡命後、生活のあり方が一変するなかで、両者は従来甘んじていた役割関係に強い不満を抱くようになる。

伯爵の従僕だった時、フィガロ夫妻は身分的にはともかく解雇されない限り経済的には最低限保証されていた。革命後、貴族の特権と資産が奪われた結果、従僕も否応なく自立を迫られた。フィガロはなりふり構わず異国の生活に順応しようとしたが、ズナンはお客に追従する夫の卑屈な態度に幻滅を感じた。彼女には夫が従僕から独立した市民へ転換したとは思われない。それは夫婦間の私的な問題に留まらず、既存の封建的身分関係の解体と市民社会の成立に伴って噴出した人間関係の再構築と夫婦関係の見直しの必要性

を示している。

スザンヌが抱いた最大の不満はフィガロが子供を持つとしないことである。もっともスザンヌ自身、革命前に繰り返し、「従僕として(いつ解雇されるかもしれない)不安定な身分にある以上、子供を持つことはできない」(S.36)と語っていた。身分だけでなく、亡命者として社会的にも不安定な立場に立たされたことで、将来に対する不安が増幅され、フィガロには子供を持つことが一層困難になったという自覚がある。彼は述べる。

「今の時代に子供を持つことはできない。新聞には隔日のように新種のガス、火炎放射器、死者の記事が載る。村の近くには要塞も飛行場も接続駅も破壊されるべきものは何もない。それでも人々は取るに足りない物さえ破壊し、地震も起きる。我々は民族移動の時代に生きているんだ、スザンヌ。今までに我々ほど確実に<我々の後にノアの大洪水が起きる！>と言えた時代はない。お前の子供を産んでごらん。その子は火山が噴火し、毒ガスが立ち込める月のような風土の中で生きることになるのだ！」(S.55)

「ガス、火炎放射器」という言葉が示すように、ここで主人公はフランス革命の時代ではなく、20世紀に生きた作者の意識を反映している。主人公の危機感、~~嫌嫌聽憶經倫返憐~~ 貴胆成% 鉅鮎2 召被禪 銚変 (国居ウ言(

もはや「自分の書いた文章を読むことさえ敢えてしない」(S.59)だろうと非難する。彼女の批判はフィガロ個人だけでなく、革命の精神を忘れて資産形成にのみ走った市民階級に向けられている。

作者の友人である作家F.T.ツォコールは同じく劇作家のF.ブルックナーに宛てた手紙の中でこの作品に言及し、「亡命者となったフィガロの独白はもはや革命的でなく、小市民的、反動的である。最後になって彼はようやく再び自分自身とスザンヌを取り戻す」と記している¹⁾。この指摘はかつて革命を先導しながら、時代から取り残され、多くの挫折を経て再び自分の最良のあり方を見出し、それとともに妻との関係を修復するに至るといふこの作品の展開を的確に捉えている。

革命後の社会と人間関係

フィガロは妻に非難されるだけでなく、別の問題に直面した。彼は亡命者として一層困難な立場に置かれた。彼が店を構えた隣国の村人達は妻をめぐる些細な誤解がきっかけで排他的意識を示す。彼らの信頼を失い、離婚によって信用を失ったフィガロは村を立ち去る他なかった。伝統的な人間関係が支配する村社会に限らず、人間性や人間関係は制度の近代化とは異なる次元で持続し、容易に合理化、近代化されない。自立の試みは亡命者としての立場と他所者を排除する圧力そして妻との関係の破綻という幾重もの壁の前で崩れ去った。それでもなお彼は自立への道を諦めなかった。

帰国した彼は貴族に従って革命を忌避した者として、旧友達に受け容れられない。彼が革命に期待した理想的な市民社会は容易には実現しなかった。彼は自分を敵視する旧友に向かって、「下僕は永遠に下僕」という運命を克服する<革命>というものを教えたのはこの私フィガロであると述べる。フィガロは孤児として差別されながらも才覚を発揮して理髪師となり、伯爵の寵を得た。彼には才能と努力によって自ら運命を切り拓いてきたという自信がある。しかし、帰国した亡命者が自立した市民となるまでには多くの障害を克服しなければならない。城館の管理者となった経緯は明示されない。

作者には主人公の自立への過程を描くことはできなかった。描くための条件は作品の内部にも作家を取り巻く外部にも存在していなかった。ともあれ帰国後の主人公には自立した市民としての誇りが見られる。

彼は旧友に向かって、「我々の生きている時代は、人間よりも時の経過の方が重要である。存在するものは墮落を超えたものだけである。それは常に求められながら、見出されることなく、しかも繰り返し失われる」(S.81)と語る。この謎のような言い回しの答えを問われた彼は、それが「人間性」であると囁く。

彼は多くの挫折を経るなかで、経済的に自立するだけでなく、求めながらも容易には見出されない人間性を重視するにいたる。彼は旧友達や孤児達に管理者としてでなく、<友>として呼びかける。伯爵の元城館に暮らす孤児達は、伯爵は政治犯ゆえ銃殺が終身刑になるべきだと考える。しかしフィガロは伯爵が犯罪者ではないと述べて相手を諷める。フィガロはすべてを失い、死を覚悟して帰国した伯爵を許す。そこには彼が封建的主従関係に代わる、個人が他者を支配することのない自立した人間同士の関係性を求めていることが窺える。

フィガロは最後に言う。

「一方的に革命の敵とされた人々をもはや迫害する必要がなくなった今、革命はついに勝利した。」(S.99)

彼が述べる革命はギロチンに象徴される憎悪と破壊、暴力が支配した実際の革命とは異なる。人間を敵味方に分けるのではなく、友愛関係に導く革命の実践、これこそ彼が革命と亡命体験を通して獲得した行動原理である。再びズナンヌとの関係に戻るならば、女性の意思を顧みることなく子供を持たないと一方的に決め、彼女に生計を維持するための協力のみを求める姿勢は、彼女の反発によって破綻した。彼は妻との離婚により社会的な信用を失い、生活基盤さえ失ったことでようやく夫婦関係の重要性に目覚める。夫婦を単に経済的単位として考えていたことを反省し、手紙で彼女に和解を求める。政治的、経済的自立のみならず、女性との共生に基づく人間的自立の必

要性が自覚された。そして政治革命の限界を見抜き、友愛の関係を夫婦のみならず社会一般の関係へと広げていこうとした。

草稿

この作品の草稿(原稿)は三幕九場面からなり、宝石店の場面や大晦日の村祭りの場面そして国際救援委員会の場面などが書かれていない。この時点では亡命先の国に配慮して書かれなかったとも見られる。草稿の最終場面で、密かに帰国しフィガロの前に姿を現したスザン又はフィガロの問いかけに答えようとせず、いきなり伯爵逮捕に抗議し、フィガロが「ずっと会っていなかったのに、なぜ君は伯爵のことばかり話すの」(S.167)と不満を漏らすなど、やや不自然な展開が見られる。

またこの草稿ではスザン又は自分から離婚を申し出たにもかかわらず、「労働許可証が切れ、食事もできなくなったからあなたの所へ戻って来たの」(S.168)と述べ、フィガロに嘘だと反駁されるお目出度さが見られ、作品の完成度は低い。自分から離婚を切り出しながら、他に頼る相手がいないから戻って来たというのは虫がよすぎる。最低限の生活維持を維持するというフィガロの生き方を批判して別れたはずである。相手に離婚を突きつけて、フィガロの生き方の転換を促した重い決断を自ら撤回するならば、彼女の言動は一貫性を失い、空転する。題名にも示され、作品展開の推進力となった<離婚>の持つ重要な意味合いが見失われてしまう。

完成稿では離婚の原因を作ったのは終末観にとらわれ、子供を作ろうとしないフィガロの悲観的姿勢にあることがはっきりしている。スザン又はフィガロの反省と意識の変化を認めて帰国した。完成稿が質的に優れていることは草稿との対比によって明らかである。なお、離婚の解消は、作家が当時の観客の作品に対する期待の地平を意識した展開といえる。

来るべき社会と人間性のヴィジョン

作者ホルヴァートは自作へのコメントとして次のように記している。

「喜劇『フィガロの離婚』はボーマルシェの『フィガロの結婚』の数年後に始められる。しかし私は自作を我々の時代に移して演じてもし支えない。なぜなら革命と亡命の問題はまず永遠の問題だからである。次に、我々の時代にそれがとりわけ切実だからである。この喜劇で起きる革命は一七八九年の偉大なフランス革命ではなく、いずれの革命でもあり得る。なぜならいずれの暴力的革命も我々が人間性として尊重し、または軽蔑する概念との関係において共通点が見出される。『フィガロの結婚』では迫り来る革命が稲光を放つ。『フィガロの離婚』ではさしあたり一つも稲光は閃かない。なぜなら人間性は雷雨を伴うものでなく、闇の中の弱い光にすぎない。いずれにせよより強い嵐がその光をかき消してしまわないことを願う。」²⁾

作者の一文からも作品が描こうとしたものは政治革命を超えた人間性及び人間関係の在り方であることが了解される。しかし、主人公が認識した人間性と友愛の姿勢はあくまで彼個人の態度に限定される。革命後の社会が人間性と友愛を基盤としたものへと質的に変化したとは言えない。革命後もフィガロ以外の人々は裏返しにされた階級意識を引き摺り、元貴族である伯爵に報復しようとした。作者が述べた通り、人間性は「闇の中の弱い光にすぎない。」

政治革命が支配層の交替に終わることなく、より高次の人間性に基づいた社会関係を実現するまではまだ長い時間と道程が必要である。作品は革命と亡命体験をめぐるシビアに展開されながら、結末はユートピア的である。³⁾

作品は一九三七年四月にプラハで初演され、「非政治的に考案された政治劇は左右勢力を一律に当てこする」とウィーンの新報紙上で劇評された⁴⁾。マックス・ブロートは「ホルヴァートのこの作品には永遠に図式的なものに対する人間的抗議、思想は杓子定規なくせに実践はしばしば反道徳的な人々に対する人間的抗議がある」と記している。⁵⁾

フィガロが革命と亡命体験の中で伯爵から自立する物語と、フィガロが妻

との離婚を経て夫婦関係を再構築しようとする物語が交錯する中で、主人公は二重に再生を遂げる。彼は経済の重要性を認識しながらも経済を超えた価値があることに思い至る。人間関係の変革なしにいかなる政治革命も完成しない。作者はナチスの迫害を逃れる亡命の途上にあって、古典の続きを夢見ながら、来るべき社会と人間性の刷新についてのヴィジョンを紡ぎ出していったのである。

注

使用テキストは Ödön von Horváth: Gesammelte (GW) Werke Bd. 8, hg. von T. Krischke unter Mitarbeit von S. Foral Krischke. 1987. Frankfurt am Main.

作品からの引用に際し、各原典該当頁を引用直後の括弧内に示した。

- 1) Horváth : GW. Bd. 8, S. 183.
- 2) Ebd. S. 11.
- 3) S. Bernhard Spies: Die Komödie in der deutschsprachigen Literatur des Exils, Würzburg 1997. S. 120f.
- 4) Horváth, ebd. S. 185.
- 5) Ebd. S. 186.